CNN English Express (2012年11月号)

Special Interview

Hiroyuki Eguchi

ミュージシャンから通訳ガイドへ転身! NHK「トラッドジャパン」の人気講師

NHK Eテレの「トラッドジャパン」で講師を務める江口さんをご存じの方も多いだろう。能や歌舞伎などの伝統文化から、マンガ、新幹線といったポップカルチャーやテクノロジーまで、さまざまな日本文化を風土や歴史などの話題も織り込んで、英語で世界に発信する番組である。通訳ガイドとしての豊富な知識と、日本文化に対するぶれない信念を持つという理由で番組講師に抜擢された江口さんだが、その経歴はとても興味深い。学生時代はエンジニアを目指し、その後ミュージシャンとして活躍。現在は、通訳ガイドの養成を本業としている。お話を伺って、常に目標を定め、それに向かって強い意志を持って着実に努力してきた方だということが伝わってきた。そして、通訳ガイドという仕事には、海外からの旅行者とじかに接して日本文化を伝える、民間外交の最前線ともいえる大切な使命があることを実感した。

取材・文:柏木美樹　写真:金子 渡

江口裕之

[CEL英語ソリューション最高教育責任者]

江口裕之(えぐち・ひろゆき)
❖1957年長崎県生まれ。国立北九州工業高等専門学校・化学工学科を卒業後、プロのミュージシャンとして全国で活動を展開。その後、通訳・翻訳家を経て通訳案内士(通訳ガイド)に転身。'89年から一貫して通訳案内士の育成に携わる。2001年1月、東京にCEL英語ソリューションズを設立し、現在、最高教育責任者。'09年4月よりNHK Eテレ語学教育番組「トラッドジャパン」講師。'12年9月よりInterFM「江口裕之のBeautiful NIPPON!」パーソナリティー。共著に『新・英語で語る日本事情』(ジャパンタイムズ)、『トラッドジャパンのこころ』『日本まるごと英単語帳』(ともにNHK出版)、『英語で伝えたいふつうの日本』(DHC)、ほか多数。音楽CDに『My Good Ol' Songs』(アソルハーモニクス)がある。

カントリーミュージシャンとして米軍キャンプで活動を開始

——江口さんはプロのミュージシャンとしても活躍されていたそうですが、英語はどうやって身につけたのですか。

江口　私は国立北九州工業高等専門学校（高専）化学工学科の出身です。高専というのは中学卒業生を対象に高等教育を5年間行う学校で、在学中はエンジニアを目指していました。それと同時に音楽活動もしていたので、音楽の道に進むかエンジニアになるか悩みましたが、卒業した年の夏に山口県岩国市の米軍基地でカントリーバンドの募集がありました。それでオーディションを受けてみると合格することができ、夢だったプロのミュージシャンとしてのキャリアがスタートしました。4年後に東京へ進出し、各地のライブハウスやスタジオ、東京ディズニーランドなどで計10年ほどカントリー音楽のミュージシャンとして活動しました。

カントリーミュージックは、
アメリカ南部の歴史や文化が
よくわかっていないと理解できない

米軍キャンプは全て英語の環境です。契約やステージの進行なども全て英語でしたので、その頃から真剣に英語を学び始めました。当時は米軍キャンプで1日の大半を過ごしていたので、アメリカに住んでいたのと同じような環境でした。彼らと食事をしたりして交流を深め、アメリカの文化がどういうものかや、文化の壁を越えて付き合う方法などを、その時期に学びました。

——カントリーというと、アメリカの歴史や自然、文化と関係が深い音楽ですよね。

江口　そうです。カントリーミュージックの場合は、特にアメリカ南部の歴史や文化がよくわかっていないと理解できませんし、歌詞に入っている地名などの固有名詞がすごく重い意味を持っていたりするんです。それに、歌詞を理解するには、普通の文章よりも文法力が必要となります。例えば、省略や倒置が多く、また行間に隠された意味や引用も多いので、単語の意味を調べたからといって、歌詞の意味がわかるわけではありません。一般に、ポップスと比べて、カントリーを理解する方が、より高い英語力や知識が求められる気がします。

米軍キャンプでの体験やカントリーの歌詞は私に英語のいろいろな側面を教えてくれましたが、音楽生活を8年ほど送った頃、カントリーの世界だけでなく、あらゆる分野で通用する本物の英語力を身につけたいという願望が湧いてきました。そこで、科学文献でも、政治や経済の記事でも、どんな英文でも読めるようになるためには、机に向かってしっかり文法からやり直さないとダメだと思いました。ある恩師の紹介で東京から熊本へ活動本拠を移し、夜は演奏、昼は英語学習と、腰をすえて英語の勉強を始めたのが28歳のときでした。

英字新聞で語彙を徹底強化し、英検1級に短期間で合格

——どのような勉強を始めたのですか。

江口　漠然と英語の勉強をしても終着点が見えないので、目標を英検1級に絞り、短期間で合格することを目指しました。当時、朝日イブニングニュースという英字新聞があったので、それを使って勉強しました。

まず、英検1級合格のためには少なくとも2万語の語彙力が必要だと思い、その単語を覚えるためには1日何個覚えなければならないかと考えました。7カ月後の試験に間に合うようにと計算したら、1日に300語を覚えなければ間に合わないという恐ろしい数になりました（笑）。この300語という数字には、忘れてしまう分も入っているんです。単語を100語覚えたときに、何日後に何語覚えているかという割合を実際に出してみて、1日にインプットする数を300にしたら、忘れた分をカバーしつつ本試験までに2万語をマスターできるという結論になったんです。

単語の覚え方は、まず、「英字新聞1面を1時間で読む」というように範囲と時間を決めます。そして読みながら覚えたい単語を蛍光ペンでマークしていきます。「この単語は以前覚えたかもしれない」と思っても、確信がなかったらもう一度マークします。そしてマークした単語を一気に辞書で引いて覚えるんです。辞書も集中して引くと、調べる速度が上がります。そして集中して記憶して、最後にもう一度英文を音読します。それを7カ月間やり続けたことで、読解力や文法力がつきました。その結果、英検1級に一発で合格し、英検協会から成績優良賞と、日本英語教育協会から文部大臣賞をいただきました。文部大臣賞をいただけたのは、英検1級の1次、2次ともに好成績でストレートで突破したというのが評価の理由だったと思います。

——それからは英語を仕事としていくようになったんですね。

江口　英検で文部大臣賞を受賞したので、当時住んでいた熊本の地元地方紙の取材を受けました。その記事がきっかけとなり、熊本のテクノリサーチパークで、科学の知識が必要なバイオテクノロジーなどの分野の通訳の依頼を受けるようになりました。バイオテクノロジーは高専時代に学んだ有機化学と通じるところが多々あったので、専門知識を生かした通訳ができ、高い評価をいただきました。その後、科学技術に関する通訳や翻訳の仕事が広がっていきました。

そんな折に、熊本市と姉妹都市を結ぶという話で、テキサス州のサンアントニオ市の市長が幾度も来日され、私は市長のエスコート通訳を任されました。訪問団の目的は文化交流の側面が強かったので、日本文化のこともいろいろ説明しなければならず、わからないことがたくさん出てきました。それがきっかけで、この先通訳として仕事を続けていくならば、日本文化の知識は避けて通れないと思ったんです。

10年後、20年後のビジョンを描きながら
目的を探すことが大切

海外での日本への関心の高まりに、通訳案内士が大きな貢献

——ご著書やNHK教育テレビ「トラッドジャパン」でもさまざまな日本文化を紹介しておられますね。

江口　日本文化は科学的な側面がいっぱいあります。私はそれに気づいてから、日本文化を知ることがとても面白くなり、より深く理解できるようになりました。例えば、陶器を作るには無機化学の知識が必要です。釉薬（ゆうやく）が変色する現象を説明するには化学的な知識が欠かせませんが、職人さんは鋭い目と勘で一瞬のうちに判断しているのです。また、刀の制作には冶金（やきん）術、日本酒や漬物の製造には有機化学や醗酵学の知識が必要です。

そのため、私が担当している通訳案内士（通訳ガイド）養成のための授業でも、いろいろなところに科学の知識を取り入れ、さまざまな角度から日本文化を見るようにしています。そうすることによって理解の度合いがより深まり、日本文化をもっと好きになってもらえるのではと思っています。

——日本文化への海外からの関心度は上がっていると感じますか。

江口　ここ10年ほどの間に、随分関心が高まってきていると感じています。ヨーロッパでは、特にイギリスやフランスの人々が高い関心を持っています。イギリスでは日本のポップカルチャーから火がつき、学校でマンガを読む時間を設けたりして、マンガを通じて日本を学ぼうという人たちも増えています。フランスでは俳句が大ブレークしていますし、日本食も人気です。このように日本へ高い関心を示してくれる人々が増えたのには、今まで活躍してきた通訳案内士の皆さんが果たした役割も大きいと思いますね。

日本人が観光する場合も、訪れる国の歴史も考えないで行った時代がありましたが、今は違います。沖縄が日本に返還された頃は、沖縄旅行というと南国のリゾートに行く感覚でしたが、今は文化や戦争のことを理解して沖縄に行くのが当然のことになりました。西洋の人々も同じで、昔は日本文化に興味を持って来日する人は少数でした。しかし、歴代の通訳案内士の皆さんが丁寧に日本文化を紹介し続けてくれたおかげで、口コミで次の世代、その次の世代へと伝わっていき、昨今の日本ブームにつながっています。

今、通訳案内士で一番需要があるのは、中国語、韓国語です。中国や韓国からの観光客で日本文化を理解したいという人はまだまだ少ないのですが、今の通訳案内士が日本文化を正しく伝えることで、興味を持つ第二世代、第三世代の人たちが必ず出てきます。何十年とかかるかもしれませんが、今が大切な時。単にいちげんの観光客とみなして、いい加減な説明をしてはいけないのです。

——最後に英語を学ぶ方にアドバイスをお願いします。

江口　英語を学ぶ目的をしっかり定めることです。私は自分が納得できるまでカントリーミュージックを理解するために、英語ができるようになりたかったし、カントリーが好きだから逆にカントリーだけしかわからないままではいたくなかった。せっかく科学の知識もあるのだから、そういったものが全部理解できた上でカントリーミュージックがやりたかった。そうやっているうちに、通訳案内士の養成のほうが主軸になりました。

ですから、英語を学ぶには目的をはっきりさせることが大事ですね。10年後、20年後のビジョンを描きながら目的を探すことが大切です。例えば「10年後に通訳になっていたい」とか、「いろいろな人と文化交流ができるようになりたい」とかでもいい。そういうふうに自分の将来的な姿を描いてみると、その1歩手前は、2歩手前はと逆算していくことで、自分は今何をやらなければならないかが見えてきますよ。

左：ロングセラー教材を全面改訂した『新・英語で語る日本事情』（ジャパンタイムズ）☞p.119に読者プレゼントがあります。
右：昨年音楽活動を再開した江口氏のソロCDアルバム『My Good Ol' Songs』（アソルハーモニクス／2012年6月8日リリース）